

## 第二章 相对主義的に見える考え方

## 第一節 クワイン

ここでは、クワイン自身が第一版の序文で、「以下において、私は、認識的意味や客観的指示対象や知識の根拠についてのさまざまに関連した自分の見解を改善し、要約し、明らかにしようとした」<sup>(1)</sup>と云っている『真理の探究』<sup>(2)</sup>を中心に、『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』<sup>(3)</sup>、『ことばと対象』<sup>(4)</sup>、『存在論的相対性とその他の論文』<sup>(5)</sup>などを参照しながら、クワインの考えのなかで相対主義的に見えるさまざまな考えについてまとめ、考察したい。その際、『真理の探究』に関しては、序文で、よりよいものにするために改訂したと言われている1992年の改訂版を使用する。

ここで考察するクワインの考えは、〈全体論〉(holism)、〈翻訳の不確定性〉(indeterminacy of translation)、〈グローバルサイエンスの決定不全性〉(under-determination of global science)、〈存在論的相対性〉(ontological relativity)である。なぜなら、クワインの考えのなかで相対主義的に見えるのは、これらの考えだからである。

これらの考えを考察する際に、翻訳の場合と理論の場合に分けて考えるのがわかりやすい。なぜなら、両方の場合に、〈翻訳の不確定性〉と〈グローバルサイエンスの決定不全性〉のように類似した考えが生じているが、それらを述べることの意図は、クワインにとって、必ずしも同じではないので、翻訳の場合と理論の場合を分けて考えなければ、混乱が生じると考えられるからである。

先に、翻訳の場合を扱う。

まず考察されるべきなのは、〈全体論〉である。『真理の探究』で、全体論とはどのような考えかがはっきりと述べられているのは、第一章の理論形成に関して論じている場所であるが、だからといって翻訳の場合に全体論が主張されていないわけではない。第三章の意味に関して論じられた箇所でも、全体論は現れている。

では、翻訳の場合における全体論とはどのような考えであり、その考えは、どのようにして出てくるのだろうか。

『真理の探究』の第三章では、『ことばと対象』でと同様に、唯一のデータが現地の人との発話と外的に観察できる状況だけであるような根本的翻訳をしようとしているフィールド言語学者の場合が考えられている。クワインによれば、このような言語学者は行動主義者でなければならない。そのような言語学者は、行動主義的な立場をとり、先のデータから推測によって翻訳のマニュアルを構成する。そして、このとき手がかりとなるのが、観察文である。観察文とは、発話直後に同意・不同意を表明できる文であり、その場で目撃している言語能力のある人みんなが同じ意見であるという意味で間主観的な文であり、状況が変われば文の真偽も変わるという意味で場面文である。つまり、「観察文とは、その言語の話者がある場面を目撃すると直ちに一致した判断を下すことのできる場面文である」<sup>(6)</sup>。

言語学者は、現地の人との発話とその発話が発せられたときに観察される状況を仮に結びつけてみて、観察される状況が同じときには、自分がその状況に対する観察文だと思ふ文を発話してみる。そして、それに対する現地の人との同意・不同意を調べる。それを繰り返すことによって、現地語と母国語を結びつけていく。もちろん、翻訳のマニュアルを構成する際に、観察文にとどまっているわけではない。母国語の〈かつ〉や〈または〉などの

論理的な語を手がかりに、得られた観察文から他の観察文をつくり、それを実地で試してみるだろう。また、観察された状況とまったく結びついていないような文に関しても、相手の知覚的状況に感情移入しながら、観察文のなかに出てきた断片を手がかりに、理解していこうとする。つまり、分析仮説をつくっていく。

しかし、観察文が、一人の人をとった場合、その文と関係づけられた刺激の範囲として、同意をもたらす肯定的刺激意味と不同意をもたらす否定的刺激意味を持っているとしても、観察文で共有されているものを刺激意味と考えることには問題がある。なぜなら、受容器が人によって異なるからである。それゆえ、刺激の間主観的な類似ということを考えないですまさなければならない。その代わりに、二つの観察文の類似を、コミュニケーションのなかにも求める。たとえば、クワインは、次のように言っている。「観察文『うさぎ』には、言語学者にとっての刺激意味がある。そして、観察文『ガバガイ』には、現地の人にとっての刺激意味がある。しかし、これら二つの文の類似性は、刺激意味ではなく、コミュニケーションに伴う外的なものの中に求められなければならない。」<sup>(7)</sup> その際、コミュニケーションが成功することが重要である。そして、コミュニケーションにおける成功は、会話がスムーズにいくということと交渉が成功するということによって、見て取れる。そして、この会話がスムーズにいき交渉が成功するというコミュニケーションの成功は、観察文だけでなく、観察文を手がかりにつくられた翻訳のマニュアルが適切かどうかを調べる際にも大きな役割を演じる。

このようにして翻訳のマニュアルを構成する際に重要なのは、〈コミュニケーションの不成功が起こった場合、与えられたデータとコミュニケーションの成功という条件を満たすような改訂ならどんなものでも受け入れられる〉ということである。そして、このような考えが、翻訳の場合の全体論である。

このような翻訳の場面の全体論に関しては、他の論文でも述べられている。たとえば、『自然化された認識論』<sup>(8)</sup>において、次のように言われている。「英語の文がアランダ語〔Arunta〕の文にどのように翻訳されようとも、その理論が全体として含意する経験が、翻訳において維持されているかぎり、どれも同等に正確な翻訳であるだろう。」<sup>(9)</sup>

次に、〈翻訳の不確定性〉を扱う。それについても『真理の探究』では第三章で論じられている。クワインによれば、「根本的翻訳をする二人の人のマニュアルはそれが予測する現地の人々の行動に関しては区別できない一方で、それぞれのマニュアルはもう一方の翻訳者ならば拒否するかもしれないような翻訳を指定することがありうる」<sup>(10)</sup> ということだが、翻訳の不確定性のテーゼである。

翻訳の不確定性については、有名な『ことばと対象』をはじめ、他でも述べられている。『ことばと対象』では、クワインは、次のように言っている。「ある言語を他の言語に翻訳するマニュアルは、さまざまなやり方でつくることができる。そして、それらすべてのマニュアルは、翻訳の対象としている言語の話者の会話の傾向性全体とは矛盾しないが、それらのマニュアル同士が、お互いに両立しえないということはある。」<sup>(11)</sup>

以上の引用からもわかるように、翻訳の不確定性のテーゼは、翻訳についての全体論と密接に結びついている。その点に注意しながら、翻訳の不確定性のテーゼに関する解説を、再び『真理の探究』に戻り検討する。

一つのまったく見知らぬ言語を母国語に翻訳しようとする、つまり、根本的翻訳をしよ

みとする異なる同国人がいるとする。仮にAさんとBさんとしよう。根本的翻訳においては、先に見たように、矛盾しないように行動と文を関係づけながら翻訳のマニュアルをつくっていく。その際、AさんもBさんもそれぞれ、自分が得た知覚的なデータやコミュニケーションの円滑さを手がかりにマニュアルをつくる。しかし、自分が得た知覚的なデータやコミュニケーションの円滑さが頼りなのだから、その点に関してのみうまくいけば、その他の点では異なってもいいことになる。全体論によれば、何か不都合なことが起こったとき必要なのは、全体的に見て不都合なことがなくなることであった。だから、全体としてうまくいってさえいるなら、同じ文に異なる翻訳を割り当ててもかまわない。つまり、つくられる翻訳のマニュアルは、異なってもかまわないのである。

では、そのマニュアルを使って予測する現地の人々の行動に関しては区別できないとしたら、AさんとBさんのマニュアルが異なっているということは、どうしてわかるのだろうか。それは、Aさんのマニュアルを使って現地語を翻訳したAさんの母国語の文とBさんのマニュアルを使って現地語を翻訳したBさんの母国語の文が、異なるからである。つまり、Aさんの母国語とBさんの母国語は同じであるはずなのに、その言語内部でそれぞれの文は同じ役割を果たしておらず、相互に交換可能ではないのである。そして、翻訳の不確定性に関して重要なのは、このような文に関しての不確定性である。

以上のように、クワインにとって翻訳の不確定性に関して重要なのは、文に関する翻訳の不確定性である。しかし、文より小さい単位に関しての不確定性はある。それが指示対象に対して述べられるなら、それは〈指示の不確定性〉になる。〈指示の不確定性〉は、〈指示の不可測性〉であり、〈存在論的相対性〉である。次に、翻訳の場合に見て取れるそれらの考えを検討する。ただし、以下において、私は、〈指示の不確定性〉、〈指示の不可測性〉、〈存在論的相対性〉を同様に扱う。<sup>(12)</sup>

指示の不確定性は、『真理の探究』では、第三章で論じられている。

確認しておく、翻訳の不確定性は、文全体のレベルで見たときでさえ不確定性があるということであった。これが、クワインの言う強い翻訳の不確定性である。それに対して、指示の不可測性・指示の不確定性とは、「文のなかの語の解釈の違いは、その文全体の翻訳が同じになるように、相殺されうるというそれほど不思議ではない考察」<sup>(13)</sup>である。それは、翻訳の不確定性ではあるが、強い翻訳の不確定性ではない。

根本的翻訳の例から見て取れる指示の不確定性は、『ことばと対象』や『存在論的相対性』でも扱われているガバガイの例を見るとわかりやすい。

〈ガバガイ〉とは、根本的翻訳をしているとき、現地の人が発する一語文である。現地の人が発する〈ガバガイ〉と発するときは、われわれが〈うさぎ〉という一語文を発したいようなときである。根本的翻訳をしている言語学者は、何度も試行錯誤したうえで、現地語の〈ガバガイ〉という観察文と母国語の〈うさぎ〉という観察文が、刺激同義的であると考えられるようになる。しかし、それだけでは相手の言語を観察文以外に広げていくことはできない。先に翻訳に関する全体論を述べるときに言ったように、分析仮説をつくっていく。分析仮説をつくる際の一つの仕事は、文ではなく単語を考えることである。〈ガバガイ〉という一語文においては、〈ガバガイ〉を一つの名辞として考えようとする考えが出てくる。しかし、〈ガバガイ〉と〈うさぎ〉という観察文同士の翻訳に何の問題がないとしても、〈ガバガイ〉という名辞と〈うさぎ〉という名辞が外延を同じくするとは言えない。

なぜなら、うさぎが現れたときそのうさぎを直接指さして示しくガバガイ」と言うという、直示という方法によってくガバガイ」の外延である指示対象を決定しようとしたとしても、そのことはうまくいかないからである。なぜなら、うさぎが見えているときは必ず、くうさぎの諸相」やくうさぎのすべての分離されていない雑多な部分」も見えているからである。くガバガイ」は、くうさぎ」かもしれないし、くうさぎの諸相」かもしれないし、くうさぎのすべての分離されていない雑多な部分」かもしれない。そして、それらの候補のどれにするかを定める際には、構造的、文脈的な特徴が問題になるのである。

再び『真理の探究』に戻るならば、このことが、存在論的相対性として考えられ、次のように説明されている。「存在論的相対性は、翻訳のマニュアルに関係している。『ガバガイ』がうさぎを表示すると言うことは、『ガバガイ』を『うさぎ』と翻訳する翻訳のマニュアルを選んでいるのであって、他のどのマニュアルも選んではいないということである。」<sup>(14)</sup>

以上で、翻訳の場合に関する、く全体論」、く翻訳の不確定性」、く存在論的相対性」を見たことになる。今度は、理論の場合に関する、く全体論」、くグローバルサイエンスの決定不全性」、く存在論的相対性」を扱う。

まず、く全体論」である。クワインは、『真理の探究』の第一章の証拠について論じた箇所ですべてを扱っている。クワインによれば、「観察定言の偽が反証するものは、その観察定言を導くのに必要であったいくつもの文の連言である。その連言を撤回するために、当該の仮説を撤回する必要はない。代わりに、その連言のどれか他の文を撤回することもできる」<sup>(15)</sup>という考えが、全体論である。理論形成に関するそのような全体論は、他の論文でもたびたび述べられている。たとえば、『経験主義のふたつのドグマ』<sup>(16)</sup>では、「還元主義のドグマは、他の言明から孤立してとられた個々の言明が、ともかく確証または反証を受けるといふ仮定のなかに残っている。私がそれに反対して行う提案は、・・・外的世界についてのわれわれの言明は、個々にではなく、全体としてのみ感覚経験の裁きに直面するということである」<sup>(17)</sup>と述べられている。つまり、「いかなる言明も改訂を免れない」<sup>(18)</sup>のである。

では、そのような考えは、クワインの場合、どのようにして出てくるのだろうか。『真理の探究』の第一章に戻って、その点を検討する。

クワインによれば、刺激が理論形成に関係するためにまず必要とされるのは、われわれの刺激と直接に堅固に関係している文であり、それは、観察文である。先にも見たように、観察文とは、発話直後に同意・不同意を表明できる文であり、その場で目撃している言語能力のある人みんなが同じ意見であるという意味で間主観的な文であり、状況が変われば文の真偽も変わるという意味で場面文である。また、観察文は、一人の人をとった場合、それと関係づけられた刺激の範囲として、同意をもたらす肯定的刺激意味と不同意をもたらす否定的刺激意味を持っている。そして、同じ観察文は同じ刺激意味を持っている。さらに、観察文はく太陽が昇り、かつ、鳥が歌う」などの連言やくこの小石は青い」などのような述定によって、他の観察文を構成することができる。このような観察文によって、言語と現実の世界が結びつけられている。そして、理論と観察を結びつけるのが、観察定言である。観察定言は、観察されるものからなる一般性を表し、それは、観察文からつくられる。観察定言は、く～のときには常に・・・」という形をしており、前者にも後者に

も観察文が入れられる。そして、観察定言自体は、場面文ではなく、定常文である。観察である実験によって理論の仮説がテストされるとき問題になるのは、このような観察定言なのである。しかし、観察定言が観察によってテストされると言っても、それが完全に検証されることができるということではない。それは反証されることができただけである。そして、反証されたとき、その反証された観察定言を導くのに必要だった文のなかの、どの文を改訂するかは、観察定言の集合である経験的内容とうまくいくものであるかぎり、任意だということになる。このようにして、クワインの場合、〈理論が、全体として、経験的内容とうまくいくかぎり、理論のなかのどの文が改訂されてもかまわない〉という全体論が出てくる。

次に、〈グローバルサイエンスの決定不全性〉を扱う。

ただ、話を先に進める前に、なぜ単なる理論と言わず、グローバルサイエンスと言うのかについて触れておきたい。もちろんグローバルサイエンスも理論であるから、先に述べた理論の全体論は当てはまる。しかし、グローバルサイエンスとクワインが言っているとき、彼は、その利点として次のようなことを考えている。「関心をさらに限定して、世界のグローバルな体系に話を絞るならば、対抗する理論をより広い理論に統合するという問題は起こらなくなる。」<sup>(19)</sup>つまり、グローバルサイエンスに話を限定することによって、議論がより単純になるのである。それゆえ、ここでは、世界に関するグローバルな体系を扱うグローバルサイエンスを問題にしたい。

【真理の探究】では、グローバルサイエンスの決定不全性の問題は、理論一般に関して述べられている [証拠] という題の第一章と [指示対象] という題の第二章を下敷きとして、グローバルサイエンスに焦点が当てられる [真理] という題の第五章で現れている。第五章では次のように言われている。「グローバルサイエンスの経験的な決定不全性と翻訳の不確定性との間には明らかな平行関係がある。両方の場合において、可能なかぎりの証拠をすべて持ち出しても、体系を一つに決めるには、不十分である。」<sup>(20)</sup>そして、この〈経験的に同値だが異なるグローバルサイエンスがあり、どんな証拠を持ってきても、それらのなかからどれか一つを選ぶには十分ではない〉という考えが、〈グローバルサイエンスの決定不全性〉である。

このような考えは、全体論から生じる。なぜなら、全体論によれば、理論が、全体として、経験的内容とうまくいくかぎり、理論のなかのどの文が改訂されてもかまわなかったからである。そのように考えるならば、経験的には同値である複数の理論が存在しうることには何の不思議もない。そして、事態は、グローバルサイエンスの場合、よりはっきりしている。なぜなら、先に述べたように、グローバルサイエンスの場合、対抗する理論をより広い理論に統合するという問題が起きないからである。

ここで、クワインが、グローバルサイエンスの決定不全性に対して、どのような態度をとっていたかを見ることは役に立つ。なぜなら、その態度を見ることによって、わざわざ分けて論じてきた、翻訳の場合と理論の場合に対するクワインの態度の違いが明らかになるからである。

クワインにとっては、経験的に同値であるけれども文ごとの再解釈によって体系的に変形する方法がない理論が問題である。クワインは、そのような場合を三種類に分けて考えている。

一つめは、二つの理論が、論理的に両立可能で同じ術語で表現され、経験的にも同値であるが、他方が真偽を決定しないままにしてある理論的文のいくつかを、もう一方が含んでいるという点で異なるような場合である。クワインによれば、その場合は、両方の理論を統合し、より豊かな理論を得ることができる。

二つめは、二つの理論が、論理的に両立可能で経験的にも同値だが、一方の理論にとって重要な術語に対応する術語を、もう一方の理論のなかには見つけることができないような場合である。

そして、三つめは、二つの理論が、論理的に両立不可能な場合である。

クワイン自身は、一番目の場合には問題がないと考えている。そして、三番目の場合に関しては、それを二番目の場合に還元できると考えている。なぜなら、彼は、二つの理論は経験的には同値なのだから、同じ術語として扱われていたものをそれぞれの理論で別の術語だと考えることによって、二つの理論を論理的に両立可能なものにすることができると考えているからである。そこで、彼にとって問題となるのは、二番目の場合ということになる。

二番目の場合、どちらを選ぶかの規準は、単純性と自然さである。しかし、対抗する理論が同様に能率的であり自然であるなら、経験主義者はためらう。その際にとることのできる一つの態度は、セクト主義的な態度である。つまり、相手の理論の異なる術語を含むすべての文脈を拒否することである。もう一つの態度は、普遍主義的な態度である。つまり、どの理論も真であると思なす態度である。そして、クワイン自身は、自分が両方の態度の間で揺れていると言っている。しかし、クワインにとっては、これは記述の仕方の問題である。対抗する理論は一つの同じ世界を記述しているのであり、その世界を把握するさまざまなやり方があるのである。

ここまで見てくると、クワイン自身が、翻訳の不確定性とグローバルサイエンスの決定不全性との違いとして何を考えているかが明らかになる。クワインは先に引用した翻訳の不確定性とグローバルサイエンスの決定不全性との類似性についての話に続けて以下のように言っている。「しかし、翻訳の不確定性はグローバルサイエンスの決定不全性に付け加えられるものである。もしわれわれが世界についての経験的にも同値な体系のなかの一つを、たとえ恣意的にであれ、選んでいるとしても、その選ばれたグローバルサイエンスの体系においてもなお、翻訳の不確定性が生じる。翻訳の不確定性に特有のもう一つの点は、接近不可能な諸事実や人間の能力の限界と、翻訳の不確定性との間には、何の関係もないことが明らかだという点である。観察可能な行動への傾向性が、意味論が正しいか間違っているかに関するすべてのことである。(14節) 一方、われわれは、世界の体系の場合には、実在が、われわれにはわからない仕方で、人間の能力のおよぶ範囲を超えていると信じるにやぶさかではない。」<sup>(21)</sup>

私には後者の相違点が重要だと思われる。翻訳の場合に関しては、クワインは、観察可能な行動への傾向性、コミュニケーションの円滑さが保たれる形での全体論を考えていた。理論であるグローバルサイエンスの場合に関しては、彼は、理論を形成するための証拠として感官面への刺激からなる経験的内容に基づく全体論を考えていた。彼にとっては、翻訳の場合、観察可能な行動への傾向性以外何も必要がないので、翻訳の不確定性は、〈意味〉という存在物がいらぬということを示すものであった。しかし、科学理論であるグ

ローバルサイエンスの決定不全性の場合に関しては、彼は、たとえ理論から離れて考えられることができないとしても、世界の存在を前提している。それゆえ、彼は、次のように言う。「翻訳の不確定性が示しているのは、文の意味としての命題という考えが弁護できないものであるということである。グローバルサイエンスの経験的な決定不全性が示しているのは、世界を表現するためのさまざまなやり方があり、それらのやり方のどれもが弁護されうるということである。」<sup>(22)</sup>

最後に、理論の場合の〈存在論的相対性〉を扱う。

『真理の探究』では、理論の場合の存在論的相対性の問題については、理論と指示対象について述べられている第二章で扱われている。初版で〔存在論的相対性〕となっていた節は、改訂版では〔信管を取り除かれた存在論〕という題に変えられているが、基本的な趣旨は同じだと思われるし、また、〈存在論的相対性〉という言葉は、同様の題名の論文のためはかなり一般的になっていると思われるので、ここでは、〈存在論的相対性〉という言葉を使って話を進めていく。<sup>(23)</sup>

『真理の探究』の第二章では、次のように言われている。「どんな具体的対象が存在するかは、観察文の真理に無関係であり、観察文が理論的な文を支持するかどうかとは無関係であり、理論が予言に成功するかどうかとは無関係である。」<sup>(24)</sup> さらに、次のようにも言われている。「二つの存在論は、それらが一対一対応していることがはっきりしているなら、経験的には同一であるとわかった。つまり、どちらか一方を選ぶための経験的な根拠はないということがわかった。」<sup>(25)</sup>

ここでも、『真理の探究』に基づき、どのようにして、理論の場合に、存在論的相対性という考えが出てくるのかを検討する。

先に見たように、われわれは、観察文から観察定言をつくり、観察定言から仮説、理論をつくっていくのであった。そして、そのように理論をつくっていくとき、物化が重要な役割を果たす。

では、物化とはどういうことであろうか。クワインによれば、物化の徴候はすでに述定的観察文に現れている。なぜなら、述定的観察文とは、たとえば、〈この小石は青い〉のような文であったからである。この文は、別々の方向を向いて発せられた〈これは小石である〉という文と〈これは青い〉という文の単なる連言ではない。それは、こっちに小石があり、隣に青い花があるということではない。両者の十分なオーバーラップが必要である。この際、焦点を当てられたものが生じてきている。そのような焦点を当てるという作業は、観察定言のなかにも現れている。先には述べなかったが、クワインは、観察定言にも、自由な観察定言と焦点を当てた観察定言があると考えている。そして、彼によれば、たとえば〈柳が川辺で育つとき、それは、川の方にしなだれる〉のような焦点を当てた観察定言には、物化の徴候が現れている。

しかし、物化のためには、あるものが繰り返し目の前に現れるだけでは不十分であり、個別化が必要である。たとえば目の前を何度も通り過ぎるボールが同じものであるかそれとも似ているが違うものであるかという問いが有意味であるとき、物化は、実質的な意味を持つようになる。クワインによれば、「そのように物体が時間をまたいで物化されることが、観察文や観察定言の守備範囲を超えていることは、明らかのように思える。実質的な物化は理論的なものである」。<sup>(26)</sup> さらに、彼によれば、日常言語の場合、物化されて



いることの基準、言い換えるならば、存在するものとして何を認めているかの基準は、物化されたものを代名詞で受けるかどうかということである。そして、述語計算の論理的表記法のなかで代名詞の役割を果たすものは、束縛変項である。それゆえ、彼の場合、「ある人が存在すると考えるものは、その人が束縛変項の値として認めるものである」<sup>(27)</sup> という考えが、出てくるのである。

上記のように、存在を変項の値として考えることについては、他のところでもたびたび述べられている。たとえば、『存在と量化』<sup>(28)</sup> では、「われわれの問いは、理論はどのような対象を要求するのかというものだった。われわれの答えは、それは、その理論が真であるためには変項の値でなければならないような対象であるというものである」<sup>(29)</sup> と言われている。

このように変項の値として存在を考えるなら、存在論は大きな役割を果たさなくなる。そして、理論の構造さえ保たれているならば、変項の値としてどのような対象が考えられても、経験的には区別できなくなる。わかりやすいのは、一対一対応の代理関数を考えることである。ある理論のなかのある語の指示対象を一対一対応する形で変換したとしても、理論全体は経験的に区別されることができない。このようにして、〈存在論的相対性〉という考えが出てくるのである。

以上で、理論に関する、〈全体論〉、〈グローバルサイエンスの決定不全性〉、〈存在論的相対性〉を見たことになる。

最後に、クワインの以上のような考えを、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》、《概念図式の評価基準》、という指標を手がかりに、整理したい。

まず、《複数の概念図式の可能性》について考えたい。概念図式という考えは、クワインの考えと密接に結びついている考えであり、彼自身、概念図式という言葉を使っている。彼は、理論が感官面の刺激を手がかりに構成されるものであると考えていたし、翻訳のマニュアルは相手の行動の傾向性を手がかりにつくられた分析仮説であると考えていた。また、何を存在すると言うか、どの文を真とするか、どの文に同意するかは、理論や翻訳のマニュアルによって異なるとも考えていた。つまり、彼は、経験を組織化し、われわれのものの考え方を規定するものがあると考えているのである。さらに、彼は、そのような概念図式、もしくは理論または翻訳のマニュアルの複数性も認めていた。同じ世界に対して複数の理論がありうるのであり、同じ言語に対して複数の翻訳のマニュアルがありうるのである。以上のように考えるならば、彼は、《複数の概念図式の可能性》を認めていることになる。

次に、《概念図式間の相互理解可能性》ということを考えたい。ここで相互理解可能性を言うために狭い意味での相互翻訳可能性を前提しなければならないとしたら、つまり、意味という存在物がありそれが同じになるように翻訳ができると考えなければならないのだとしたら、クワインは相互理解可能性を否定していることになる。なぜなら、先に見たように、彼は、翻訳の不確定性ということ述べていたからである。また、彼以外の場合なら概念図式間の相互理解可能性を保証しうる行動主義的な意味でのコミュニケーションの可能性も、彼の場合は、概念図式間の相互理解可能性を保証しない。なぜなら、会話がスムーズにいき交渉が成功するという意味でコミュニケーションがうまくいっていることは、どの翻訳のマニュアルも前提としていることであり、コミュニケーションがうまくい

っているという点だけでは、翻訳のマニュアルの違いは理解されないと考えられていたからである。けれども、クワインは、異なる概念図式同士がお互いに相手がどのようなものを理解できると考えていた。なぜなら、意味という存在を否定した彼にとっては、概念図式の違いは表記の違いによって明らかになるのであり、表記の違いは理解できるものだったからである。彼は、実際、異なる翻訳のマニュアルや理論を理解し、マニュアル同士や理論同士を比較していた。たとえば、翻訳のマニュアルの違いを、Aさんのマニュアルを使って現地語を翻訳したAさんの母国語の文とBさんのマニュアルを使って現地語を翻訳したBさんの母国語の文が異なるということによって、理解できると考えていた。

最後に、《概念図式の評価基準》について考えよう。確かに、クワインは翻訳のマニュアルのどれか一つだけが正しいと言えるとは考えていなかった。また、理論に関しても、セクト主義をとるか普遍主義をとるかで揺れていた。それゆえ、彼は、概念図式の厳密で確実な評価基準を否定していると考えて問題はないだろう。しかし、彼は、どのような概念図式でもよいとは考えていなかった。彼は、単純性や自然さを考慮することによって概念図式間の評価ができると考えていた。また、彼は、感官面の刺激などに訴えることを、理論の証拠として認めていたし、翻訳のマニュアルに関して言えば、会話がスムーズにいき交渉が成功するという意味でコミュニケーションがうまくいっていることが、翻訳のマニュアルであるためには必要なことであった。意味という存在物を認めないからといって、どのような翻訳のマニュアルが適切かということに関する基準がないわけではなかった。

以上のように、クワインの立場は、《複数の概念図式の可能性》や《概念図式間の相互理解可能性》を認めているが、《概念図式の評価基準》に関しては、どんな概念図式でもよいわけではないが、複数の適切に思える概念図式のなかからどれか一つを選ぶ厳密で確実な基準はないと考えているものである。

## 第二節 クーン

クーンの『科学革命の構造』<sup>(1)</sup>は、科学者や科学史家だけでなく、哲学者にも大きな影響を与えた書物である。ここでは、彼の考え方が科学史としてどういう意味を持つかということではなく、彼の考え方が相対主義とどう関係するかということに注目して、『科学革命の構造』でのクーンの考えをまとめてみたい。そして、その際、1969年につけられた補章と『パラダイム再考』<sup>(2)</sup>、『客観性、価値判断、理論選択』<sup>(3)</sup>の1974年と1973年の両論文も参考にする。

クーンが『科学革命の構造』を書いたときの目的は、新しい科学史観を示すことだった。彼が疑問視したのは、科学は累積的に発展するとか、科学史の仕事は、誰がいつどんな発見をしたかを決定し、迷信を説明することだといった考えである。そして、新しい科学史観として提示したものが、有名な科学革命という考え方であり、パラダイム変換という考え方なのである。

では、科学革命という考え方で科学史を説明するとは、どういうことなのだろうか。以下において、それを見ていきたい。そのなかで、その考えのどのような点が、相対主義的と見なされるかも明らかになるだろう。

科学革命とは、科学がどのようにして変化してきたかを説明するための概念である。彼は、科学の変化の過程として、次のように考える。まず、あるパラダイムを共有している通常科学がある。そのなかで通常科学では処理できない変則的なことが生じる。そのなかのいくつかの場合に、通常科学への疑念が生じ、危機という状況が起きる。そこでは、それに対処しようとして複数の理論が存在するようになる。そして、そのなかのどれかが、後継者を引きつけるような大きな仕事をし、多くの人があるパラダイムに改宗し、改宗しない人は排除されるようになり、新しい共通のパラダイムを持つ専門家集団ができあがる。つまり、それが、新しい通常科学となるのである。

そのような過程の例としてクーンが挙げているものを最初に見ておくことは、今後の考察に役に立つだろう。通常科学、パラダイム、変則などの言葉がそれぞれ何を意味するかを見る前に、彼が挙げている若干の例を紹介する。ここで挙げている例で出てくるパラダイムや変則などの言葉は、後から説明されるものとして、さしあたりは詳しい説明を省くことになる。

クーンは、事実の場合と理論の場合をそれぞれ見ることによって、パラダイム変換について考察している。

まず、事実に関しては、以下のように言われている。「発見は変則に気づくことで始まる。つまり、自然が、パラダイムから生じた、通常科学を支配している予測を何らかの形で破るのに気づくことから始まる。それから、続いて、変則の生じた場所を広く探求する。そして、変則が予測されるものになるように、パラダイム理論が修正されて終わる。」<sup>(4)</sup>

では、具体的にはどのようなことが言われているだろうか。挙げられている一つの例は、酸素の発見である。プリーストリーは、現在酸素と呼ばれる気体の分離に成功していた。しかし、彼は、それを現在言うような意味での酸素だとは考えなかった。なぜなら、彼は、フロギストンが出ていくことによってものが燃えると考えた説をとっていたからである。それゆえ、彼は、酸素を発見したとは言われていない。普通酸素を発見したと言われるの

は、ラヴォアジエである。しかし、彼が酸素を発見した時点特定することは難しい。彼は、それを分離したとき、それを空気そのものだと考えていた。単に気体を分離しただけでは発見とは言えない。そして、クーンは、「酸素の発見のような出来事を分析するために、われわれが、新しい語彙と概念を必要とするということは明らかである」<sup>(5)</sup>とし、発見は概念が変わっていく過程だとする。そして、そのような発見には、先に変則に気づいていることが必要であった。クーンは次のように言う。「ラヴォアジエは、新しい気体の発見に関与するずっと前から、燃素理論がどこかおかしいと考えており、燃焼する物体は大気のある部分を吸収すると考えていた。・・・酸素についての仕事は、ラヴォアジエがもともと持っていた、どこかおかしいという感じに、形式と構造を与えた。」<sup>(6)</sup>つまり、ラヴォアジエは、酸素燃焼理論をとり、パラダイムが変わったので、酸素を見つけることができたのである。

次に、理論についてである。クーンは、次のように言っている。「大規模なパラダイムの破壊と通常科学の問題や技術における大きなシフトを必要とするために、新しい理論の出現の前には、一般に、研究者に不安感がある時期がある。想像できるように、その不安感は、通常科学のパズルが思うようにうまく解けないことが長く続くことによって生じる。既存の規則の失敗は、新しい規則の探求の序曲である。」<sup>(7)</sup>そして、ここでも、フロギストンの例は使われている。ラヴォアジエは、燃素理論に反対して、酸素燃焼理論を出したと言われている。そして、クーンによれば、その背景となっていたのは、ラヴォアジエの時代の気体化学の状況である。当時、気体化学において、燃素理論ではうまくいかないものが多くなり、燃素理論のさまざまな解釈が行われるようになっていた。たとえば、燃素理論では、ものが燃えるのはフロギストンが出ていくからである。確かに、紙や木は燃えれば灰になり、軽くなるように見える。しかし、実際には、燃やすと重さを増す金属が存在する。それゆえ、それをどのように解釈するかという問題が生じ、新しいパラダイム、この場合では酸素燃焼理論をとることになったのである。

さて、話を元に戻そう。これらの例で見られる過程を、クーンは科学の変化だと考える。次に、ここでは、これらの過程を一般的に理解することを試みたい。そして、そのために、その過程のなかで生じてきた概念を、それぞれ検討する。

まず、通常科学から始めよう。クーンは通常科学でどのようなことを考えているのだろうか。彼は、『科学革命の構造』の第二章で、次のように言っている。「この本では、『通常科学』は、過去の科学的業績にしっかりと基づいてなされる研究を意味する。そして、その科学的業績は、ある特定の科学者集団によって、一定の間は、さらなる実践の基礎を与えるものとして認められている。」<sup>(8)</sup> また、その前書きでは、「私は、パラダイムということで、一定の間、専門家の集団に対して、何が問題であるか何が解決であるかのモデルを与える一般に認められた科学的業績を考えている」<sup>(9)</sup>と言っている。したがって、通常科学は、ある特定のパラダイムに基づいてなされる研究ということになるだろう。

では、パラダイムとは何なのだろうか。『科学革命の構造』の本文でも、パラダイムについて述べられている。たとえば、上記の引用では、パラダイムは科学者集団が共有する科学的業績であると述べられている。また、第二章では、支持者を引きつけるだけのユニークさを持ち、解決すべき問題を与えてくれるものと言われている。しかし、補章では、自分のパラダイムという言葉が二つの異なる意味で使われていたと言ったうえで、パラダ

イムについて詳しく考察しているので、ここでは補章でパラダイムについてどのように言われているかを考察しよう。

補章では、「われわれは、科学者集団を、先にパラダイムに訴えることなしに特定できる。その後で、われわれは、所与の集団のメンバーの行動を吟味することによって、パラダイムを見つけることができる」<sup>(10)</sup>とされている。そして、クーンは、初版でパラダイムと言われていたものを二種類に分ける。つまり、「一方では、パラダイムは、ある特定の集団のメンバーによって共有されている、信念や価値や技術などの全体的構成を意味する。他方では、それは、その構成のなかの一つの要素、つまり、具体的なパズル解きを示している。そして、その具体的なパズル解きは、モデルや例として使われることにより、明示的規則に代わって、通常科学の未解決のパズルを解くための基礎となりうる」<sup>(11)</sup>と言う。そして、パラダイムという言葉は誤解を生んだとして、前者の意味でのパラダイムを表すために、専門母体という言葉を使おうとする。彼は、そのような専門母体の主要な要素として、記号的一般化、特定のモデルに対する確信、価値、見本例を挙げる。そして、その姿勢は、『パラダイム再考』においても同様である。

記号的一般化とは、グループのメンバーによって問いや異議なしに使われる表現のことであり、 $\langle f=ma \rangle$  のような全称化されたもののことである。そして、特定のモデルに対する確信と言われていたときのモデルとは、説明やパズルの解決として何を受け入れるのか、どんなパズルが重要なのかを決定するのに役に立つものである。たとえば、クーンは、 $\langle$ 熱は物体の構成部分の運動エネルギーである $\rangle$  というようなことを考えている。また、価値では、たとえば、 $\langle$ 予測は正確でなければならない $\rangle$  などが考えられている。さらに、見本例としては、具体的なパズル解きのことを考えている。それらは、教科書などに載っている問題と解答の例のことである。クーンによれば、見本例を通して類似関係を学ぶことによって、知識を手に入れる。彼は、次のように言っている。「境界線や規則に頼るよく知られた戦略に切り替えることが適切である場合もある。しかし、それは、刺激やデータを処理するための唯一の適切な戦略というわけではない。他の戦略、学習された類似性の知覚と私が呼んできたものに基づいている戦略も存在する。言語学習、科学教育、科学的実践のどれを観察しても、実際、その別の戦略が広く使われていることがわかる。認識論的議論においてその戦略を無視するならば、知識の本質についての理解をひどくゆがめることになるだろう。」<sup>(12)</sup>そして、この見本例というのが、後者の意味でのパラダイムになる。

以上のように、クーン自身は、補章や『パラダイム再考』では、パラダイムという言葉を使わずに、専門母体、見本例という言葉を使おうとしている。けれども、その言葉遣いは、少なくとも一般には、そう広がっていないように思われる。また、科学者集団に共有されるものが、専門母体と言われるにせよ、パラダイムと言われるにせよ、通常科学にとって重要な役割を果たしているのであった。それゆえ、ここでは今後も、上記で専門母体として分析されているものについてパラダイムという言葉を使い続けていきたい。

このようにパラダイムを考えるならば、通常科学が共有しているものは、記号的一般化であり、特定のモデルに対する確信であり、価値であり、見本例である。

では、ある特定のパラダイムのなかで行われる通常科学の研究とはどのようなものだと考えられているだろうか。『科学革命の構造』の本文に戻って、その点を考察したい。

クーンによれば、通常科学の研究の仕事は、有意味な事実の決定、事実と理論の調和、理論の整備である。パラダイムが事物の本質を示していると思われてきた既知の事実を測定する方法を見つけること、理論が行う予測が正しいことを証明する事実を測定すること、万有引力定数のような定数を決めることによってのようにパラダイムにまつわる不明瞭さを解決すること、理論の精度を増すこと、適用範囲を広げること、それらは重要である。しかし、これらの通常科学の研究は、クーンによれば、新しいものを生み出すのではない。このような研究は、決まった答のあるパズルを解くようなものである。そして、彼は、次のように言う。「われわれが今まで見てきたパズル解きの活動としての通常科学は、非常に累積的な事業であり、科学知識の範囲と精密さを着実に広げるという目的を達している。」<sup>(13)</sup>

けれども、クーンによれば、通常科学が、変化するときが来る。そして、その際、変則、危機ということが大きな役割を果たす。

変則は、そのパラダイムで解けないというだけではない。今そのパラダイムのなかで解けていないだけであるなら、それがパラダイム内部で解決すべき問題になる場合もある。クーンは次のように言っている。「通常科学を構成するパズルと以前呼ばれていたものは、科学的研究のための基礎を与えているパラダイムがすべての問題を完全には解決していないからこそ、存在する。」<sup>(14)</sup> それゆえ、「変則が危機を引き起こすなら、それは、普通、単なる変則以上のものでなければならない」。<sup>(15)</sup> そして、クーンによれば、どのような変則なら危機を引き起こすのかに関する一般的な答えはない。たとえば、パラダイムの基礎に反したり、応用が重要になったり、通常科学が発展して状況が変わったりして、変則が危機を引き起こすようになる。いずれにせよ、多くの専門家が変則だと認め、人々に単なる変則以上のものだと思われたとき、パラダイムがさまざまに解釈されるようになり、今まで解けていた問題の解決さえ怪しくなり、危機という状況になるのである。

さらに、危機に関しては次のように言われている。「すべての危機は、パラダイムがぼやけ、その結果通常研究のための規則がゆるむとき始まる。」<sup>(16)</sup> また、そのようにして生じた危機は、通常科学のパラダイムで解けることもあれば、そのまましておかれることもあれば、新しい通常科学が生じることによって終わることもある。そして、先に、科学の変化の過程としてとられていたのは、危機が新しい通常科学の受け入れで終わる場合である。

では、どのようにして、新しいパラダイムが受け入れられ、それが通常科学になるのだろうか。変則が重要視され危機が生じる際には、複数の対立する考えがあるのが普通であると考えられていた。そのなかで、どのようにして、パラダイムの選択がなされるのだろうか。

その際の状況は、それほど簡単ではない。クーンは次のように言っている。「競合するパラダイムを主張する人たちは、常に、多少なりとも、目的が食い違っている。どちらの側も相手が自分の正しさを立証するために必要とする非経験的な過程のすべては認めようとしないうらう。」<sup>(17)</sup> 彼によれば、対立するパラダイムを同一の基準ではかることはできないのである。

では、なぜ同一の基準ではかることができないのだろうか。

そのための理由として、クーンが挙げているのが、通約不可能性 (incommensurability)

である。彼によれば、パラダイムを異にする人は、お互いに異なった世界で仕事をしている。なぜなら、パラダイムが異なることによって、何を世界を構成する構成物と見なすか、その構成物の性質としてどのようなものかを考えるかは異なるからである。パラダイムが異なるならば、同じ術語や概念や実験を使っているとしても、それらは同じではない。また、何を科学的とするか、何を問題とするか、どういうときに問題が解決されたと言うかなどの基準も異なる。たとえば、ものに内在する力での説明は、古代では当たり前だった。それが、一時期、認められないものとなった。しかし、ニュートンの重力が認められるようになり、また、内在する力での説明が使われるようになった。また、クーンは次のような例も挙げている。それは、ウィリアム・ハーシェル卿による天王星の発見の後の状況である。クーンは、ハーシェルによって恒星でも彗星でもない惑星として天王星が発見された後、たくさんの小惑星が発見されたことが、科学的知覚の変化の証拠だと考えるのである。

以上のように、通約不可能性のために対立するパラダイムを同一の基準ではかることができないとしたら、「あるパラダイムに忠節を誓うことから他のパラダイムに忠節を誓うことへの変化は、改宗という経験であって、外から強制されるものではない」<sup>(18)</sup>。そして、パラダイムを変化させるために必要なのは、説得である。クーンは、パラダイム変換をめぐる戦いに効果のある議論として、危機に導いた問題の解決・古いパラダイムではまったく考えられていなかった現象の予測・個々人の何が適切であるか何が美的であるかの感覚に訴えることを挙げている。しかし、彼によれば、それらの論点でさえ絶対的なものではない。「つまり、新しいパラダイムを初期に採用する人は、古いパラダイムで失敗する問題はほんの少しだと知りながら、新しいパラダイムが直面する非常に多くの問題に関して、新しいパラダイムが成功するという信念を持っていなければならない。その種の決断は、信念に基づいてのみ、なされうる」<sup>(19)</sup>と彼は言う。そして、ごく一部の支持者、たとえばその分野への新参者がパラダイムを変え、パラダイムを改良し、支持者を増やしていくことによって、集団としてのパラダイム変換が起こると考えるのである。

それゆえ、このような科学の変化は、累積的ではない。そうではなく、その変化は科学革命である。

では、科学革命とは何であろうか。今まで見てきたように、クーンによれば、科学は、ただ累積的にのみ発展するのではなくて、部分的であれ全体的であれ、パラダイムが置き換えられることによって変化する。そして、そのような科学革命は、政治革命と類似点を持っている。クーンによれば、政治革命も科学革命も一定の集団に属する人々にとって今までのパラダイムがうまく機能しなくなったときに生じる。つまり、「政治的発展の場合も科学的発展の場合も、危機になりそうだという機能不全の感覚が、革命の必須条件なのである」<sup>(20)</sup>。さらに、科学革命は政治革命ともう一つの類似点も持っている。つまり、「競合する政治制度の間の選択のように、競合するパラダイムの間の選択は、両立不可能な共同生活のあり方の間の選択である」<sup>(21)</sup>。そして、自分のパラダイムを擁護するのに自分のパラダイムでの論理や自分のパラダイムを背景とした実験を根拠とするので、パラダイム選択の問題は論理や実験だけでは決着がつかない。クーンによれば、新しいパラダイムを受け入れるために、古いパラダイムを放棄することは、本質的なのである。

新しい事実が生じる場合と新しい理論が生じる場合について、クーンは、それぞれ次のように言っている。「自分の自然についての予測がうまくいかなかったり、自分の器具

がうまく働かなくなったときにのみ、予期されていない新しい出来事、新しい発見が生じうる。・・・したがって、変則を示すパラダイムと、後に変則を法則的なものにするパラダイムの間には対立がなければならないということは、明らかである。」<sup>(22)</sup>「しかし、既存の理論の自然への関係における変則を解決するために新しい理論が提起されるなら、成功した新しい理論は、前のものから生じる予言とは異なる予言をどこかで許さなければならない。」<sup>(23)</sup>新しいパラダイムと古いパラダイムは対立するのである。

もちろん、クーンは、アインシュタインの力学とニュートンの力学を矛盾するものとしてとらえない解釈があることを知っている。つまり、くニュートン力学は実際に役に立っているし、工学者は使っているし、物理学者もある範囲では使っている。限定をつけた応用では、ニュートン力学の予測は十分正確であるということが、相対性理論から示されるくという考えがあるということを認めている。ここでは科学史としての正当性について扱うつもりはないので詳しく述べることはしないが、しかし、クーンは、そのような解釈があるということを知ったうえで、その場合も本質的には古いパラダイムの放棄だと考える。彼は、適用範囲を限定するということを、適切な方法とは考えない。既存の範囲だけの探求では、解くべきパズルさえない。そのうえ、彼によれば、相対論力学に限定を加えてニュートンの運動法則などと形において同じものが出てきたとしても、それは相対論力学の特殊な場合であって、解釈を加えなければニュートンの法則にはならない。そして、その解釈のためには相対論力学の概念を使わなくてはならない。

以上のように、クーンは、科学の変化をパラダイムの置き換えだと考え、科学革命であると考え。

しかし、科学革命によってパラダイムが変化し、パラダイムが変化したことによって、世界観が変化するということを、普通、われわれは気がつかない。けれども、クーンによれば、そのことは、科学革命が生じていないということではない。彼によれば、科学革命の存在やその重要性に気づかせないようにしているのは、科学の教科書や科学の教科書になぞらえた啓蒙書や科学の教科書になぞらえた哲学的著作などの権威である。それらは、過去の革命の後の安定した結果を記録し、現在の通常科学の基礎を示している。そのため、教科書的なものは、歴史を再構成し、科学史を直線的、累積的なものと見なす歴史観を示している。それゆえ、革命が起こったように見えないからといって、それは、科学革命という過程を経て科学が変化したということに対する反論にはならない。

また、科学の変化を科学革命と考え、それが累積的ではないと考えるからといって、クーンが科学の進歩を認めていないわけではない。もちろん、科学が進歩していると考えやすいのは、パズル解きという累積的な仕事をしている通常科学の時期であるだろう。そして、前パラダイムの期間や革命の間のように、対立する学派があり、お互いの基礎についての問題を常に投げかけているときには、科学に関しても、進歩が疑われるだろう。しかし、革命というものは、どちらかの全面的な勝利で終わる。そして、勝った方は、自分を正当化する。革命の結果は進歩でなければならない。けれども、彼によれば、革命の結果が進歩であるのは、自己の正当化のためだけではない。パラダイム間の選択を行うのは、科学者集団である。そして、「科学者集団は、パラダイム変換によって解決される問題の数を増やし、精度を高めるためのもっとも効果的な機関である」。<sup>(24)</sup>彼らが、新しいパラダイムを選ぼうというときには、二つの条件が満たされていなければならない。一つは、



他の方法では解けない問題を解決できるということであり、もう一つは、以前解けていた問題に関しても、以前同様に解くことができるということである。「結果として、新しいパラダイムがその前任者ができたことすべてをすることは、滅多にできないか決してできないかであるとしても、新しいパラダイムは、普通、過去の業績の実質的な部分の大半を保持し、そのうえで、常に、具体的な問題解決を付け加える。」<sup>(25)</sup>

このように、科学革命の結果は進歩として扱われることができるのだが、それは、唯一の真理に直線的に近づいていくという意味での進歩ではない。クーンが捨てようとしているのは、そのような意味での科学の進歩である。

以上のようなクーンの考えは、相対主義的に見える。パラダイムが違えばわれわれは異なる世界を見ている。パラダイムが違えば何を世界と考えるかも違う。複数のパラダイムをそのパラダイムの外に立って比較することはできない。パラダイムが違えば何が問題であるか、何が解答であるかに関しても一致することができない。パラダイムが違えばそれらは通約不可能である。パラダイムの選択は改宗である。そのためには説得が必要であるが、その説得のための効果のある論点の一つに個々人の何が適切であるか何が美的であるかの感覚が挙げられる。つまり、異なるパラダイムのどちらかを選ぶための客観的な基準はないのである。

1969年の補章では、特に、第五節と第六節で、人々が持つだろうそのような素朴な感覚に対するクーンの意見が述べられている。また、1973年の『客観性、価値判断、理論選択』では、理論選択の際の価値の働きについて述べられている。それゆえ、『科学革命の構造』に焦点を当て、先に挙げた指標を使って、彼の考えを整理する前に、補章や『客観性、価値判断、理論選択』でどのように述べられているかを見ておくことが必要であると思われる。ここにおいて、パラダイム選択と言わずに理論選択と言われていることが気になるかもしれない。しかし、それは、先に見たように、彼が、パラダイムという言葉を避けようとしているからであると思われる。それゆえ、以下では、パラダイム選択と理論選択を同様に扱う。

まず、少し長いですが、補章の第五節からの引用を見てみよう。

「十章と十二章で、私は、そのような避けることのできない論争をしている各派が、両派が用いている実験や観察の状況のあるものを、異なって見ていると論じた。しかし、彼らがそのような状況を議論する際に使っている術語はほとんど同じなので、彼らは、それらの術語のあるものに異なる性質を与えているに違いないし、彼らのコミュニケーションが部分的なものに過ぎなくなるのは避けられない。結果として、ある理論が他の理論より優れているということは、論争では証明されえない。むしろ、それぞれの学派は、論争ではなく説得によって相手を改宗させようとしなければならない。そう私は主張した。ただ哲学者だけが私の議論のこれらの部分の趣旨をひどく誤解した。そして、彼らの多くは、私が以下のように信じていると報告した。つまり、通約不可能な理論の擁護者はお互いにまったくコミュニケーションすることができない。結果として、理論選択に関する論争では、よい理由に訴えることはできない。むしろ、理論は結局は個人的で主観的な理由によって選ばれなければならない。実際になされた決定の際に重要なのは、ある種の神秘主義的な統覚作用である。」<sup>(26)</sup>

また、『客観性、価値判断、理論選択』の冒頭でも、自分が理論選択に関してよい理由

がないと考えているということは誤解であると述べている。

つまり、クーンは、通約不可能な理論の擁護者がまったくコミュニケーションできないということ、理論選択に関する論争でよい理由に訴えることができないということは、誤解だと言っている。では、彼は、どのように考えているのであろうか。

クーンは、補章で、理論選択の論争は、証明ではなく、前提に関してのものであり、証明の可能性のための準備段階であると言う。推論の前提や規則は最初から決まっているものではないのである。しかし、だからといって、選択のためのよい理由がないということではない。そうではなく、それは、理論選択のための中立的なアルゴリズムはないということである。選択の際には価値がよい理由として機能している。それゆえ、どちらかが選ばれるためには、価値を共有することが必要である。けれども、価値を共有するためには、相手を説得しなければならない。ここで、通約不可能性が問題になる。

通約不可能性ということを考えれば、お互いに話すべき中立的な言語はない。しかし、クーンによれば、頼るべきものはある。彼は、次のように言う。「彼らに影響を与える刺激は同じものであり、たとえプログラムのされ方が違おうとしても、彼らの一般的な神経器官は同じものである。そのうえ、経験の、非常に重要であるとしても狭い範囲を除くなら、彼らの神経プログラムのされ方でさえ、ほとんど同じであるに違いない。なぜなら、彼らは、ごく最近の過去以外は、歴史を共有しているからである。結果として、彼らは、日常生活も科学的世界や言語の大部分も共有している。」<sup>(27)</sup> そのように、共有されるものを手がかりにお互いを理解するのである。クーンはさらに次のように言っている。「要するに、コミュニケーションの決裂のなかにある人ができることは、お互いに異なる言語集団のメンバーであることを悟り、翻訳者になることである。」<sup>(28)</sup>

つまり、クーンによれば、刺激や神経器官が同じであるということや共有されている術語や日常的語彙を頼りにしながら、変則的な行為を単なる間違いだとか相手の変なのだとか考えることなしに相手を理解しようとするならば、翻訳ができ、コミュニケーションできるようになるのである。

理論選択の際に価値がよい理由として働くということに関しては、『客観性、価値判断、理論選択』のなかで、より詳しく論じられている。

クーンは、正確性、無矛盾性、広範囲性、単純性、多産性というような、理論の適切さを評価するための標準的な規準を認めている。それが、彼にとってのよい理由である。しかし、それらの規準は、完全には客観的なものではない。彼は、次のように言っている。「個々の規準は曖昧である。したがって、具体的な場合に適用する際にそれぞれ異なる仕方でも適用されるということは正当である。そのうえ、複数の規準が一緒に使われるとき、それらがお互いに対立することがたびたびある。」<sup>(29)</sup> そのように、彼は、規準が主観的要因をまったく含まないという考えを否定している。彼は、次のように言っている。「したがって、私が重要視していることは、競合する理論の間の個々の選択はすべて、客観的要因と主観的要因の混合物に、もしくは、共有された規準と個人の規準の混合物に基づいているということである。」<sup>(30)</sup>

けれども、それらの規準が主観的要因を持つということは、それらの規準が理論選択の際に有効性を持たないということではない。クーンによれば、〈人手が多ければ仕事は楽になる〉という格言と〈船頭多くして船山に登る〉という格言が反対のことを言っている

にもかかわらず、それらの格言が無意味なものではないように、それらの規準は、主観的要因を持っていても、理論選択の際に有効に機能しうる。決定を特定しはしないけれども、決定に影響を与えるようなものがありうる。彼によれば、先に挙げた規準は、そのようなものとして、言い換えるならば、価値として理論選択の際に影響を与える。「正確性、無矛盾性、広範囲性のような価値は、個別にであれまとめてであれ、適用の際に曖昧であることが証明されるかもしれない。つまり、それらは選択のための共有されたアルゴリズムのための十分な基礎にはなりえない。しかし、それらは、多くのことを規定している。つまり、決定を行うためにそれぞれの科学者が何を考えなければならないか、何を関連しているものと考え、何を関連しているものと考えないか、自分が行った選択の基礎として何を報告するよう求められるのが正当であるのかなどを規定するのである。」<sup>(31)</sup>

そのように、クーンが理論選択の際に主観的要因があると言っていることは、理論選択が議論不可能な好みの問題であるということではない。また、偏見や個人的な好き嫌いが機能しているという意味で主観的であると言っているのでもない。

ただし、以上のように、よい理由があり、翻訳ができるからといって、理論選択が決定できるというわけではない。それはやはり改宗の問題なのであり、よい理由や翻訳は、決定に影響を与えるものなのであり、決定を特定するものではないのである。

さらに、補章の第六節では、自分の科学に対する考えが相対主義だということに反対している。クーンにとっては、「異なった理論の擁護者は、異なる言語・文化集団のメンバーのようなものである。その平行関係を悟ることは、ある意味ではどちらのグループも正しいかもしれないということを示唆している。文化やその発展に適用されるなら、その立場は、相対主義的である」。<sup>(32)</sup>けれども、彼は、科学に対しては、そのようなことは当てはまらなないと考えている。彼によれば、科学の発展は逆行できない。以前の理論と今の理論を比べるならば、今の理論は、問題解決力において勝っているのであり、今の理論の方が以前の理論より進歩した理論なのである。

では、以上のような『科学革命の構造』とその1969年の補足等から理解されるクーンの立場を、『複数の概念図式の可能性』、『概念図式間の相互理解可能性』、『概念図式の評価基準』という指標を手がかりに、整理するとしたらどのようになるだろうか。

まず、『複数の概念図式の可能性』について考察する。一般に、クーンのパラダイムは、概念図式に相当すると考えられる。なぜそのように考えられるかを確認するために、ここでは、後には専門母体と呼ばれるパラダイムとして、彼がどのようなものを考えているかを振り返っておきたい。先に述べたように、彼によれば、パラダイムとは、ある特定の集団のメンバーに共有されている信念や価値や技術などの全体的構成であった。そして、その要素として、記号的一般化、特定のモデルに対する確信、価値、見本例などが考えられているのであった。つまり、どのような表現が異議なしに使われるかということ、説明やパズルの解決として何を受け入れるかということ、何に価値をおくかということ、何を見本例として使うかということなどを規定しているのが、パラダイムなのである。彼は、経験を組織化し、われわれのものの考え方を規定するものがあると考えていた。また、彼は、どちらも適切に思える複数のパラダイムの対立を認めていた。つまり、彼は、『複数の概念図式の可能性』を認めているのである。

次に、『概念図式間の相互理解可能性』について考察する。先に見たように、クーンは、

通約不可能性ということを考えていた。彼によれば、パラダイムを異にする人は、お互いに異なった世界で仕事をしているのであった。つまり、パラダイムが異なることによって、何を、世界を構成する構成物と見なすか、その構成物の性質としてどのようなものかを考えるかは異なる。そして、パラダイムが異なるならば、同じ術語や概念や実験を使っているとしても、それらは同じようには関係していない。また、何を科学的とするか、何を問題とするか、どういうときに問題が解決されたと言うかなどの基準も異なる。それゆえ、異なるパラダイムは通約不可能であり、その意味で両方のパラダイムは相互理解不可能と言えるかもしれない。しかし、彼は、自分の理論を、通約不可能な理論の擁護者の間の完全なコミュニケーション不可能性を述べているものだと考える立場を否定していた。彼が否定したのは、お互いが話すべき中立的な言語があるということであった。彼は、補章等では、刺激や神経器官が同じであるということや共有されている術語や日常的語彙を頼りにして、異なるパラダイムを翻訳することができると考えていた。つまり、翻訳可能性という意味でのコミュニケーションの可能性を認めていたのである。そのように考えるならば、彼は、《概念図式間の相互理解可能性》を認めていることになる。

では、《概念図式の評価基準》についてはどうだろうか。クーンによれば、異なるパラダイムを持っている人は異なる世界で仕事をしているので、対立するパラダイムを同一の基準ではかることはできないのであった。パラダイム選択の問題は、論理や実験だけでは決着がつかない。そして、それゆえ、パラダイムが変わるのは改宗なのである。ただし、彼は、選択するためのよい理由がないと考えているわけではなかった。先に見たように、彼は、選択の際に価値がよい理由として働くということを認めていた。正確性、無矛盾性、広範囲性、単純性、多産性というような、適切さを評価するための標準的な規準を認めていた。ただ、それらの規準は、完全には客観的なものではなかった。選択のための共有されたアルゴリズムはないのである。彼によれば、その選択は、客観的要因と主観的要因の混合物だった。彼は、次のように言っていた。「選択のためのよい理由は、改宗のための動機や改宗が起こりやすい風土を与える。さらに、翻訳は神経系をプログラムしなおすための出発点を与えるかもしれない。そして、それは現時点では不可解であるとしても、改宗のための下地を与えるに違いない。しかし、よい理由も翻訳も改宗を構成しない。」<sup>(33)</sup>つまり、彼は、《概念図式の評価基準》が厳密で確実なものだということを否定していたのである。しかし、そのことは、彼にとっては、どんな概念図式も同程度によいということ認めさせるものではなかった。彼は、今の理論の方が以前の理論より優れていると考えていた。彼にとっては、優れた理論と優れていない理論の区別はあり、どの理論も同程度によいというわけではなかった。

以上のように考えるならば、クーンは、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》を認めただけで、《概念図式の評価基準》が厳密で確実なものであることを否定しているということになる。ただし、彼も、概念図式の選択がまったく主観的になされると考えてはいないのである。

### 第三節 グッドマン

グッドマンは、世界が複数あると考え、自分自身の考えを相対主義だと言っている。『世界制作の方法』<sup>(1)</sup>で、彼は、「今まで私が言ってきた内容は、率直に言えば、徹底した相対主義の傾向を示している」<sup>(2)</sup>と述べている。しかし、彼は、今引用した箇所続けて次のようにも言っている。「無数の他にとることのできる真または正しい世界バージョンを喜んで受け入れるという態度は、どのようなバージョンでもよいということを意味しないし、冗長な話が簡潔な話と同じであるとか、真理はもはや偽から区別されないということの意味するのではない。そうではなく、ただ、真理が出来合いの世界との一致とは別の方法で理解されなければならないということの意味するのである。」<sup>(3)</sup>

では、グッドマンの場合の相対主義はどのようなものなのであろうか。以下において、その点を考察したい。その際、主に、『世界制作の方法』にしたがって話を進める。なぜなら、彼は、この本のなかで、次のことを目指しているからである。つまり、彼は、「以下の議論での私の目的は、カッシーラーと私が共有するいくつかのテーゼを擁護することではなく、それらのテーゼが提起するいくつかの重要な問題を詳しく見ることである。どのような意味で多くの世界が存在しているのか。何が純粋な世界をにせの世界から区別するのか。世界は何からできているのか。世界はどのようにしてつくられるのか。その制作の際に記号はどのような役割を演じているのか。世界制作は知ることとどのように関係しているのか。これらの問いは、たとえ十分で最終的な答えが遙か遠くにあるとしても、正面から取り上げられなければならないものである」<sup>(4)</sup>と言っているのである。それゆえ、この本にそって、彼の考える世界の複数性、より厳密に言えば、世界バージョンの複数性を見てみるのがわかりやすいと思われる。また、『事実・虚構・予言』<sup>(5)</sup>をも考察の対象とする。なぜなら、世界の複数性についての彼の論では、投射可能性 (projectibility) という概念が大きな役割を果たすからであり、投射可能性の概念に関しては、『事実・虚構・予言』のなかで詳しく扱われているからである。

まず最初に、『世界制作の方法』に焦点を当てながら、〈世界が何からできているのか〉、〈世界はどのようにしてつくられるのか〉、〈その制作の際に記号はどのような役割を演じているのか〉ということについて検討する。具体的にグッドマンがどのようにして世界がつくられると考えているかを先に見ておいた方が、〈どのような意味で多くの世界が存在しているのか〉というかなり抽象的な問題が見通しのよいものになるように思われるからである。

グッドマンは世界制作の工程としてどのようなものを考えているのだろうか。彼は、すべてではないと留保をつけてはいるが、その工程の主要なものとして、合成と分解、重みづけ、順序づけ、削除と補充、変形を挙げている。ここでそれらの工程それぞれについて簡単に見ておきたい。

グッドマンによれば、合成や分解とは、ばらしたり結びつけたりすることである。合成の例としては、たとえば、時間的に異なる出来事が一つの固有名のもとに集められ、〈一つの対象〉や〈一人の人間〉をつくり上げる場合が挙げられている。たとえば、われわれがある人を〈一人の人間〉として扱う場合、われわれは、その人をずっと見続けているわけではなく、異なるときに見たり聞いたりしたさまざまな情報を集めて、その人を〈一人

の人間〉として理解している。また、分解の例としては、エスキモーの雪が挙げられている。われわれが区別しないものも、エスキモーは区別しているのである。さらに、隠喩上の転移では、合成と分解の両方が使われている。たとえば、甘いという語は、分解の結果、ある味に適用されるようになる。そして、その語が音楽と結びつくことによって、甘いという語の適用範囲が広がっていくのである。

重みづけの違いとは、何を有意な種とするかの相違である。グッドマンは、「世界の間の違いのいくつかは、含まれている存在者に関係するのではなく、強調やアクセントに関係している。そして、これらの違いは、存在者の違いに劣らず重要である」<sup>(6)</sup> と言っている。彼の挙げている例は、異なる画家が同一人物を描いた肖像画の間の相違である。その相違は、どの点に強調をおくか、特徴のなかで何を重視するかによるのである。

さらに、グッドマンは、次のように言う。「存在者や強調という点では異なる世界が、順序づけ〔ordering〕で異なることがありうる。たとえば、構成体系が異なる世界は、派生の順序が違っている。」<sup>(7)</sup> そして、彼は、このような順序づけも世界制作の工程のなかに数え入れる。彼によれば、順序づけが異なれば、知覚されたパターンも異なる。たとえば、「12音音階のもとで知覚されたパターンは、伝統的な8音音階のもとで知覚されたパターンとはまったく異なるのである」<sup>(8)</sup>

削除と補充とは、古い素材を取り除き、新しい素材を供給することである。たとえば、手品のことを考えれば、あるものが見えなくて、ないものが見えるということは、よくあることである。また、アナログな体系をデジタルの体系に変換することは、アナログでは存在しているものを削除することだし、くある条件の下で二つの光点が短い距離を隔て相次いで点灯されると、われわれには光点が動いたように見える〉というような運動の知覚では補充が行われている。

変形も世界制作の工程の一つである。それは、つくり直すことである。たとえば、物理的長さが等しい線でも、両端に外向きの矢がついているか、内向きの矢がついているかで、長さが違って見える。視覚が変形を加えているのである。

では、グッドマンは、このようにしてつくられる世界が、何からできていると考えているのだろうか。彼は、ある世界はある他の世界からつくられると考えている。彼は、次のように言う。「世界をつくっている多くの材料—物質・エネルギー・波動・現象—は、世界とともにつくられる。しかし、何からか。いずれにせよ、無からではない。そうではなく、他の世界からつくられる。世界制作は、われわれが知るかぎり、常に、手持ちの世界から始まる。制作は再制作である。」<sup>(9)</sup> ただし、ここで考えられている他の世界は、後に見るように、一つの現実の世界に対する可能な他の世界ということではない。そうではなく、現実の世界である。しかし、これはまだ正確ではない。なぜなら、彼は、ヴァージョンを離れた世界を認めないからである。つまり、彼は、何らかの世界ヴァージョンから離れた世界自体のようなもの、ヴァージョンから離れた事実は認めないのである。なぜなら、われわれが何らかの語彙から離れて語ることはできないと考えるからである。グッドマンによれば、「世界制作はあるヴァージョンで始まり、他のヴァージョンで終わる」<sup>(10)</sup>

では、く世界制作の際に記号はどのような役割を演じているのか〉という問いに関してはどうか。記号の役割としては、外延指示や表出や例示などがある。たとえば、固有名や名詞句は外延指示をする。く横山幹子〉は、その外延である私を指示するだろうし、

《今私の目の前にある机》は、その外延である机を指示するだろう。しかし、外延指示をするのはそのような記述だけではない。文字によってはなされない描写も外延指示をする。たとえば、肖像画を考えればわかりやすいだろう。例示は、見本の場合を考えればわかりやすい。生地の見本は、たとえば、その生地の色や模様を例示している。例示においては、「記号は、何かを外延指示していてもいなくても、文字通りであれ隠喩的であれ、自分が持つ性質の見本として役に立つことによって、何らかのものの記号となっている」。<sup>(11)</sup> 表出されるものは、たとえば、悲しみという感じである。ある絵は、悲しみを表出するかもしれないし、ある音楽は喜びを表出するかもしれない。そして、記号作用のなかで重要なのは、外延指示だけではない。グッドマンは、「単独であれいくつか結びついてであれ、記号作用のさまざまな様態や手段は、強力な道具である」<sup>(12)</sup> と言っている。

グッドマンによれば、以上のようにして世界制作はなされるのだが、そのような世界制作は知ることと密接に関係している。彼によれば、知ることは真理を知ることだけではない。知ることは、今まで理解できなかったことを理解できるようになるということである。それには、たとえば、画家ごとに分類された作品の間の様式を区別できるようになることも含まれる。このような理解は、創造と関係している。たとえば、何らかの法則を見つけることとその法則を起草することは、大いに関係している。それゆえ、世界制作は知ることと密接に関係することになる。グッドマンは、次のように言っている。「私が議論してきた世界制作のすべての工程が知ることと関係している」<sup>(13)</sup>

以上のことをふまえたうえで、〈どのような意味で多くの世界が存在しているのか〉、〈何が純粋な世界をにせの世界から区別するのか〉という問題の考察に移りたい。

どのような意味で多くの世界が存在しているのだろうか。

グッドマンは、自分が言う世界の複数性について、次のように言っている。「われわれは唯一の現実の世界に対する複数の可能な他の世界について話しているのではなく、複数の現実世界について話している」<sup>(14)</sup> つまり、自分の考えは可能世界論ではないと述べているのである。そして、現実の世界を扱うのだということは、虚構も、現実の世界に適用されるということである。彼の言葉を借りれば、「したがって、虚構は、書かれたものであれ描かれたものであれ演じられたものであれ、実際は、何ものにも適用されないのでもなければ、ほんやりした可能世界に適用されるのでもなく、隠喩によって、現実の世界に適用されるのである」<sup>(15)</sup>

また、先に見たように、グッドマンは、何らかの世界バージョンから独立した世界があるとは思っていない。それは、一つの世界を考えようが、無数の世界を考えようが同じことである。彼は、「記述されたものが何であれ、われわれは記述方法に制限されている。われわれの宇宙は、いわばこれらの方法から成るのであって、一つであれ複数であれ世界から成るのではない」<sup>(16)</sup> と言うのである。

そして、そのような世界バージョンの多様性は、たとえば運動の記述としてとることのできるものが複数あり、お互いに変換されるということだけを意味するのではない。還元できない世界バージョンも認めるのである。二枚の絵画はお互いに還元できないかもしれないが、ともに世界バージョンでありうる。グッドマンは次のように言っている。「多くの異なる世界バージョンは独立した興味と重要性を持ち、唯一の基礎への還元可能性を要求も前提もしない」<sup>(17)</sup> また、次のようにも言われている。「物理学という唯一

の基礎への還元可能性の証拠はとるに足りないものであり、主張としてさえ漠然としている。なぜなら物理学自体断片的で不安定であり、企てられた還元の種類や帰結も曖昧であるからである。」<sup>(18)</sup>

そのうえ、それらの世界バージョンは対立していてもかまわない。グッドマンによれば、「ともに真であるものは決して対立しないとか、すべての真であるバージョンは唯一の現実世界において真であるとか、諸真理の間の見かけの不一致は、採用された枠組みや規約における違いにすぎないというような基本的な諸原則」<sup>(19)</sup>は、おかしい。もちろん、〈兵士全体が弓矢で武装している〉という文と〈一人の兵士も弓矢で武装していない〉という文の間の相違のように、たとえば、時間や場所の限定によって、簡単に対立をなくすことができるような場合もある。しかし、そううまくいく場合ばかりではない。彼は、〈すべての点は一本の垂直線と一本の水平線からできている〉と〈どの点も直線やその他のものからできていない〉の場合を挙げている。これらは矛盾するが、前者は直線だけからなると考えられた空間見本では真であり、後者は点だけからなると考えられた空間見本で真である。〈ある体系では〉という限定を加えても、問題はなくなる。〈ある体系では、すべての点は一本の垂直線と一本の水平線からできている〉という文の真理値と〈すべての点は一本の垂直線と一本の水平線からできている〉という文の真理値は同じではない。それは、〈歴代のスパルタ王は二票持っていた〉と〈ヘロドトスによれば、歴代のスパルタ王は二票持っていた〉の真理値が等しくないのと同様である。適用範囲の制限も役に立たない。先の点に関する二つの文を異なった点に適用される言明と考えるのは不可能である。どちらもあらゆる点について語っているのである。グッドマンは、次のように言っている。「こうして、対立するかなり包括的な体系やバージョンの場合は、それらの領域が一つの世界の内部にあると見なされるよりは二つの異なる世界として見なされる方が適切であり、また、二つの世界は平和的に結びつくことを拒否するのだから、対立した世界があると見なすことさえ適切である。」<sup>(20)</sup> もちろん、対立している特徴をすべて捨てることによって調停は可能かもしれないが、そうすると事物や事実や世界について重要なことは何も言わないバージョンしか残らなくなる。そして、グッドマンにとっては、そのことは好ましいことではなく、複数のバージョンを考えた方がよいのである。そして、彼によれば、われわれはそのときどきで、バージョンを使い分けている。彼は、次のように言っている。「実践においては、もちろん、われわれは好きなところに線を引き、自分の目的にふさわしいようにたびたびそれを変える。」<sup>(21)</sup>

つまり、グッドマンは、世界制作のされ方によって無数の他にとることができる正しい世界バージョンが生じることを認める。そして、彼によれば、それらの世界バージョンはみな現実である。しかし、バージョンから離れた世界というものはない。それゆえ、異なる世界バージョンは同じ世界が異なって表現されているのだと考えることはできない。また、それらの世界バージョンが一つに還元される必要もないし、互いに対立していてもかまわない。そのようにして、彼は、世界バージョンの複数性を主張するのである。

しかし、グッドマンにとって、それは制約のないものではない。言い換えるならば、どんな世界バージョンでもよいというわけではない。彼は、次のように言う。「無数の他にとることのできる真または正しい世界バージョンを喜んで受け入れるという態度は、



どのようなヴァージョンでもよいということを意味しないし、冗長な話が簡潔な話と同じであるとか、真理はもはや偽から区別されないということの意味するのではない。」<sup>(22)</sup>このようにして、〈何が純粋な世界をにせの世界から区別するのか〉という問題、言い換えるならば、どのようにして正しいヴァージョンと間違っただヴァージョンを区別するかという問題が出てくるのである。

グッドマンによれば、真理だけでは正しいヴァージョンと間違っただヴァージョンを区別する基準としては不十分である。なぜなら、今まで見てきたように、彼は、世界制作に携わるのは、記述や理論にかぎらないと考えているからである。絵や音や身振りなどの言語的でない体系の記号もある。文字通りでないものとしての隠喩や、外延指示しないものとしての例示や表出もある。それゆえ、たとえば、芸術作品も世界制作に携わるのである。

しかし、真理を排除するわけではない。グッドマンは、先ず真理について考察したうえで、真理以外の基準について話を広げていく。

グッドマンによれば、真理のテストは絶対確実である必要はないし、その際使われる手段、たとえば、有効性や信頼性や整合性が、なぜ使われることができるのかを示す必要もない。そして、「何が真理であるかのもっともよい説明は、真理を判定するのに使われる検証や手続きによる『操作的』説明であるだろう」<sup>(23)</sup>と言うのである。ただし、どれか一つを真理と同一視しようとする立場は否定される。

では、真理とは異なる基準についてはどう考えられているのだろうか。

まず考えられているのは、演繹的論証の正しさについてである。演繹的論証においては、真理だけが問題であるのではない。なぜなら、その推論が妥当であるためには、規則にあっていようかが問題であり、前提と結論は偽でもかまわないからである。しかし、「演繹的論証は前提が真であり推論が妥当であるときにのみ、十全な意味で正しい。そのように、演繹的論証の正しさは、妥当性を必要とする一方で、まだ真理と密接に結びついている」。<sup>(24)</sup>

次に考えられているのは、帰納的論証の正しさについてである。帰納の妥当性も、演繹的論証の場合と同様に、規則にあっていようかが問題なのであり、前提の真偽は問題ではない。そのうえ、前提が真であり帰納が妥当であったとしても、帰納が正しいとはかぎらない。先ず第一に、調査したケースすべてを考慮に入れなければならない。一つでも反例があってはならない。第二に、証拠となる言明や仮説が、任意の場合から他の場合を推定するにふさわしいような述語で、つまり、投射可能な述語で、表現されなければならない。<sup>(25)</sup>グッドマンによれば、扱っている全ケースが1977年以前に調査されたものだとしても、どんなケースもすべて1977年以前に調査されるだろうと考えるのはおかしい。なぜなら、証拠となる言明や仮説が、適切な投射可能な述語で述べられていないからである。「要するに、帰納の正しさは、論証が、投射可能な述語で表現された、調査ケースに関するすべての真である報告からなる前提から始まるということを要求する。」<sup>(26)</sup>

ここまでは、真理に関係するにせよしないにせよ、言葉を使ってなされたものに関する考察だった。グッドマンはさらに、言葉以外でなされたヴァージョンの正しさについても扱っている。まず何らかの形で外延指示をすると考えられるものに関しては、彼は、言明はそれがあつた世界ヴァージョンに適合していればその世界ヴァージョンにとって真であるのと同様に、言語以外でなされた外延指示も、それがあつた世界ヴァージョンに適合してい

ればその世界バージョンにとって正しいと考えている。

しかし、先に見たように、言葉以外でなされたバージョンと言っても、何らかの外延指示をするものだけではない。例示や表出ということもあったはずである。ここでは例示に関して見てみよう。公正な見本とはどんな見本なのだろうか。ここでも投射可能性が問題になる。同じ布から切られた生地見本でも、生地全体を投射できるものとできないものがある。樽のなかに詰められた混合種子の見本の場合、見本の混合比から樽のなか全体の種子の混合比を知ることができたならそれは公平な見本である。

以上見てきたように、正しいバージョンと間違ったバージョンを区別することに関するグッドマンの考えにおいて大きな役割を果たしているのは、投射可能性という考えである。しかし、『世界制作の方法』においては、投射可能性ということについて、十分に詳しく述べられているわけではない。以下では、それについてもう少し主題的に扱っている『事実・虚構・予言』を参照として、投射可能性について見てみたい。

『事実・虚構・予言』のなかで、グッドマンは、投射可能な仮説と投射不可能な仮説をどのように区別するかの手がかりがないように見えていると言っている。

このことを述べる際の、グッドマンの〈グリーン〉と〈ブルー〉の例は有名である。〈ブルー〉とは、時刻  $t$  より前に調べられたものについては〈グリーン〉であり、それ以外のものについては〈ブルー〉であるということを表す彼の造語である。エメラルドの色を調べたときの時刻  $t$  における証拠は、与えられたエメラルドが〈グリーン〉であることの証拠でもあるし、同時に〈ブルー〉であることの証拠でもある。〈すべてのエメラルドはグリーンである〉という仮説・予言（仮説のすべての未決定のケースが未来のケースである場合）も〈すべてのエメラルドはブルーである〉という仮説・予言もともに成り立つことになるのである。しかし、続いて調べられたエメラルドの色は、〈グリーン〉であるか、〈グリーン〉でなく〈ブルー〉でありしたがって〈ブルー〉であるかのどちらかであり、両方であることはできない。

けれども、グッドマンは、投射可能な仮説と投射不可能な仮説を区別できないとは考えていない。彼は、投射の理論を提出している。

彼は、まず、どのような場合に〈現実に投射された〉のかについて考察する。そして、その後で、〈現実に投射された〉から〈投射可能性〉への投射を見るのである。

では、〈現実に投射された〉というのは、どのような場合だろうか。グッドマンは、次のように言っている。「仮説は、その例のいくつかが調べられ、真であると決定された後で、かつ、残りの例が調べられる前に採用されるとき、現実に投射されたと言われるだろう。」<sup>(27)</sup>

このような現実の投射から投射可能性を考える際、対立する仮説を考えてみることに役立つ。先の〈グリーン〉と〈ブルー〉の場合を考えてみよう。エメラルドに関して、〈ブルー〉ではなく〈グリーン〉が投射されるのは、われわれが今まで〈グリーン〉を投射してきたからである。つまり、〈グリーン〉の方が〈ブルー〉より前から投射されているし、投射された数も多いし、今まで投射されたという事実がある。つまり、現実の投射を見ることによって、〈グリーン〉は〈ブルー〉よりも強く擁護されていると考えられるのである。

この擁護の強さということが、仮説や予言の投射可能性と密接に結びついている。そし

で、グッドマンは、投射可能性に関して次のように言っている。「支持され、打ち消されず、調べ尽くされていない仮説だけが投射可能なので、さしあたり、それらの仮説に注意を集中することができる。そのような仮説のなかで、二つの仮説HとH'が対立し、HがH'より強く擁護され、Hがそれよりも強く擁護される仮説のどれとも対立しないとき、HはH'を凌駕すると言われる。われわれの規則は次のようになる。つまり、仮説は、すべての対立する仮説が凌駕されるなら、投射可能的であり、自分が凌駕されるならば投射不可能的であり、また、他の仮説と対立し、かつ、どちらも凌駕されないとき非投射的である。」<sup>(28)</sup>

もちろん、投射可能性の度合いという問題もある。そして、それは、擁護されるというのはどういうことかという問題になる。ここでは、それらに対するグッドマンの細かい考察に触れることはしない。しかし、そこにおいて重要な点は、グッドマンが、「帰納的な妥当性の根源は、われわれの言語使用のなかで見つけることができる」<sup>(29)</sup>と考えているという点である。彼によれば、過去の現実の投射や他の述語の現実の投射などから、われわれは擁護の強さを判断しているのである。

【事実・虚構・予言】では、投射可能性について、以上のように扱われていた。そして、このような投射可能性という考えが、先に述べた正しいヴァージョンと間違っただけのヴァージョンの区別という際に、大きな役割を果たしているのである。

以上が、相対主義に関するグッドマンの考えである。

最後に、以上のような考えを、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》、《概念図式の評価基準》という指標を手がかりに、整理したい。

まず、《複数の概念図式の可能性》についてである。グッドマンは、世界は他の世界からつくられると考えていた。より正確には、世界ヴァージョンは他の世界ヴァージョンから再制作されると考えていた。そして、世界制作の工程の主要なものとして、合成と分解、重みづけ順序づけ、削除と補充、変形を挙げていた。また、その際、記号は、外延指示や表出、例示などの役割を果たしていた。それゆえ、世界ヴァージョンによって、その世界ヴァージョンが外延指示したり、表出したり、例示したりするものが異なることになる。つまり、彼は、経験を組織化し、われわれのものの考え方を規定するものがあると考えていた。以上のことを考えるならば、グッドマンの言う世界制作の結果得られた世界ヴァージョンのある程度包括的なヴァージョンの場合、それを概念図式と考えてかまわないだろう。また、グッドマンは、世界ヴァージョンの複数性を主張していた。つまり、彼は、《複数の概念図式の可能性》を認めているのである。

次に、《概念図式間の相互理解可能性》ということを検討する。グッドマンは、われわれがそのときどきで目的にあわせて世界ヴァージョンを使い分けられることができると考えていた。そして、目的別に選ぶことができるということは、それぞれの世界ヴァージョンを理解しているからできることであるだろう。それゆえ、世界ヴァージョンを概念図式と考えるならば、彼は、《概念図式間の相互理解可能性》を認めていることになるのである。

最後に《概念図式の評価基準》ということに関してである。グッドマンは、複数の世界ヴァージョンから一つの世界ヴァージョンへの、言い換えれば、唯一の基礎への還元可能性を認めていなかった。彼は、無数の他にとることができる世界ヴァージョンがあると考えていた。そして、彼によれば、無数の他にとることができる世界ヴァージョンのどれか

一つだけが、あらゆる点において適切なものとして選ばれるわけでもなかった。そのように、彼は、《概念図式の評価基準》が厳密で確実なものであることを否定していた。しかし、彼の場合も、概念図式を選択を行う際に何の基準もないのだとは考えていなかった。少なくとも、彼は、正しい世界バージョンと間違っただけの世界バージョンを分けていた。確かに、彼は、真理だけがその基準だとは考えていなかったし、真理が出来合いの世界との一致によって理解されることも考えていなかった。けれども、彼は、投射可能性という考えを手がかりに、正しい世界バージョンと間違っただけの世界バージョンを区別できると考えていた。グッドマンにとっては、正しいバージョンと間違っただけのバージョンの違いはあるのであり、どのようなバージョンでもよいというわけではなかったのである。

以上のように見てくるならば、グッドマンは、《複数の概念図式の可能性》を認めている。また、彼の考えは、《概念図式間の相互理解可能性》も否定しない。彼は、それらを認めただけで、《概念図式の評価基準》に関しては、あらゆる点において適切な一つ概念図式を選ぶことはできないと考えている。ただし、彼の場合も、そのことは、《概念図式の評価基準》がまったくないということの意味してはいないのである。